

立羽不角年譜稿 三

安田吉人

本年譜は、平成十二年三月発行『調布日本文化』第十号掲載の「二」を継ぐものである。今回は、元禄十五年から宝永二年までの四年間分であるが、法橋位を得るための京旅行と前句付俳諧興行の衰勢という、不角の生涯の転換期に当たっている。

元禄十五年（一七〇二）壬午 四十一歳

○ 一月、不角編、歳旦帖『元禄十五壬午歳旦』刊。自序、不角の歳旦・歳暮発句各一句、歳旦三つ物三組（一組は不角発句）を収録。「近年、五穀高直にて、人民以もつてのほか之ほか外ほかに金難」と始まる序文は、福神が吉例により歳旦帖を奉納するよう命じる書簡の形式をとる。挿絵も福神の使者である武士の形をした白鼠と鯰に対し、正装の不角が歳旦帖を献上する様子が描かれている。

・門松は海老の尾よりやしらへけん
松月堂不角

唯一の伝本京都大学頼原文庫蔵本は、板下の文字や丁付・匡郭の違いから、数冊の不角門の歳旦帖を合冊したものと推察される。入集者には、桃隣・謂北・浮生・清書所六車らの名も見える。

※半紙本一巻一冊。自家版。書名は頼原文庫本の刷込の内題による。外題は後補書題簽の「元禄十五年歳旦」。

○ 二月二十五日、不角編、発句集『奉懸誹諧之発句 聖廟八百年祀』成か。不角の発句を巻頭に、一門の奉納句を収める。奥書は「元禄十五己午歳二月廿五日、願主敬白」。

・好文木の徳、をぐらき事を誉め奉りて

八百枝さきぬ梅は霞に文卷花 松月堂不角

※原本未見。天理図書館綿屋文庫蔵、桃隣自筆本『年々艸』収録の書写による。

○同日、一句付前句付興行始まる。以後、毎月一〇・二五日を締切日に設定し、宝永元年五月に至る。投句数三八一句は、最大時（元禄一六年四月一〇日）には、一一二三句にまで増加する。

不角点の一句付は、前句題一句に対し、付句一句を投句するものである。前句付高点集『せとりぶね』では、毎回一八番までの高点句を紹介する。不角の点印「神妙・秀逸・無極・大極・銀漢・九曜・蒼冥・龜・秀」と、一蜂の点印「亜極・秀至・逸至・金至・銀」の、二種類の点印を組み合わせて順位を定める。もう一人の点者河曲一蜂は、玄札門の宗匠で、江戸神田住。ただし、同書では、一蜂の点であることは明記していない（『せとりぶね』・『松月堂不角・一蜂点前句付高点句巻』）。

▽三月、轍士編、俳諧評判記『花見車』成。遊女に見立てて評される。

・▲太夫 不角

書林。つねに書物をすいて見さんすゆへかしこし。手もよし。されど、みやこへはむかぬ風俗也。奥すじの客をよふたらさんす。○前句づけの本、数く。

不角の学識と手跡には一定の評価を与えているが、俳風が都には不向きで、主に奥州筋の田舎客に人気があるとも指摘する。

▽三月、胡叟編、俳諧撰集『かぶと集』成。不角の発句一句収録。三河国の胡叟の上洛記念集。

・松虫の声もつかへぬばせを哉 不角

○五月二日、門人山東朋角に招かれ、友人一蜂と川越に遊ぶ。途次、白山権現で俳諧の心得のある桑門と出会い、三人道中となる。川越泊。朋角は、武士であったが、この年川越に隠棲した。和漢の道に通じ、特に俳諧を好んだと言う。前年『笠の蠅』の旅から帰った不角を迎えた時も、朋角の発句で歌仙が巻かれている。

○二三日、川越の名所を見物し、「人間八景」の発句を詠む。

・人間夜雨

炬消たきていづち鶴舟か蓑の音 不角

○ 二八日、餞別・留別句を詠みあい、翌日帰宅するか。

・ あくれば晦日なれば

身はさらば一日跡に時鳥

不角

○ 不角編、俳諧紀行『人間川やらすの雨』成。自序。上巻は、川越到着までの街道の様子や逸話を交えた俳諧紀行。下巻では、名所評判記風に川越を紹介する。巻末に三吟（不角・明角・一蜂）七十二候一卷、追加四吟（好角・不角・桃隣・九角）歌仙を付す。

・ 誰方に寄ルみよし野の田植歌

好角

蛭しごき出ス昨日着た簀

不角

温泉に流るゝ硫黄堰留て

桃隣

※半紙本二巻二冊。自家版。国会図書館他蔵。刊記はなく、序中に「午二月中の二日」とあるだけだが、署名に「法橋」を用いないこと（元禄一六年の叙任以降は、ほとんど俳号の上に付している）、明角・一蜂とは、この年前後に最も親交があったこと（明角は元禄初年の高点集類には見えない）などの理由から、本年と確定できる。加藤定彦氏他編『関東俳諧叢書』第一巻に翻刻。

▽ 五月、巨海編、俳諧撰集『石見銀』成。不角の発句一句収録。巨海が職務の合間に集めた発句を、言水の後援で刊行した書。諸国俳家の作を集めた四季発句に見える。

▽ 九月一六日、書肆柏原屋清右衛門編、雑俳撰集『当世誹諧楊梅』刊。不角点の前句付勝句を収録。三都点者の前句付・笠付・段々付等を紹介した雑俳集だが、不角点・其角点として掲げる作品は、すべて不角の『二葉の松』の流用である。

○ 一〇月二五日、不角点、前句付高点清書句巻『松月堂・一蜂点前句付高点句巻』成。同日締切の一句付前句付興行にあたって作成された、褒賞用の清書巻である。

「楽に成たりらくに成たり」の前句題に寄せられた付句を、不角と一蜂がそれぞれ点印順に配列したもの。巻頭に不角・一蜂両点者から高点を得た嵐吹・治角の付句が、点者の清書により、彩色絵入りで認められている。以下、前半に不角点の高点句と奥書、後半も同形式で一蜂の高点句を挙げる。

高点集『せとりぶね』に入集する句は、本巻の上位一八番と一致している。両書に記された句数から、全投句八七三句の内、三三・

七%がなんらかの点印を受けていること、しかし、高点集に入集するのは、わずかに二・一%に過ぎないことなどがわかる。

※卷子本一巻。柿衛文庫蔵。『柿衛文庫目録』（柿衛文庫編・平成二年刊）には、書名に「一峰」とある。奥書の署名は印と重なり甚だ判読が困難であるが、本年の一峰との親交や、大阪女子大学蔵『宝永五年点取帳』に、不角と並んで点者を務める一峰の署名から、ここでは、「一峰」と改めておく。

元禄十六年（一七〇三）癸未 四十二歳

▽ 一月、紫珊瑚編、雜俳撰集『万歳烏帽子』刊。不角点の前句付収録。貞徳らの付句、芭蕉・信徳らの前句付、如泉・言水らの笠付を紹介する。しかし、其角・無倫点是不角の『千代見草』の流用であり、芭蕉点も『続猿蓑』の連句を用いたものである。なお、改題偽版として『七いろは』『蔵びらき』が刊行されている。

○ 四月九日、師不卜の十三回忌に剃髪。桃隣らから祝賀の発句が寄せられる。

・ けし坊主木のはしでなし草のはし 不角

・ おもくれつ（ず）そつた目からは夏柳 不角

・ 青梅や法師に成て堆ウツクカき 太白太 桃隣

師恩に報いるためという理由の他に、「貴人より夜る召れても、髪ゆふべくもなく、取まはしのよきは坊主也」とも述べている（『誹諧一峠』）。

○ 四月、脇起表八句点取興行始まるか。出題された不角の発句に、脇起表八句を一揃いとして投句するもので、各句に点印を付し、総合点で入選を決める（『兎手柏』）。

○ 五月二八日、備角（池田綱政）の参勤交代に従って、上京の旅に発足する。鈴が森・池上を経て、金川泊（以下、特にことわらない限り『蠅袋』による）。

・ 不角も上京する。幸の事よと供にめしたて、紀行の事共いひかたらひつゝ、

日和よし道の記俗蠅の宿 びかく

つゝがなく吉祥草キキョウに上る露 不角

この旅の最大の目的は、京において法橋の位を得ることである。「人として貴人にまみゆるに、無位無官にしては天のとがめもやと、一ツの大望を発して」(『誹諧一峠』)と、自ら語る。不角の俳壇における勢力基盤が武士であることが、以後も続く身分へのこだわりとなっているのかもしれない。

池田綱政は、備前国岡山藩主。実質的な岡山藩祖で熊沢蕃山らを重用した好学の名君光政の子。寛永一五(一六三八)に生まれ、三五歳で藩主となる。父の後を受け、藩政の基盤を二代で築いたと言われる名君。元禄一六年には六六歳。

○ 二九日、戸塚・藤沢を経て、大磯泊。旅館にて、備角・雷角・竜角・笋角と五吟半歌仙を巻く。また次の付合もこの夜の作。

・みじか夜ぞ不角行て寝い明逢アスアス びかく

蚊も歯のたゝぬ畏り眠ダク

不角

この付合は、権門におもねる不角の態度として、後世しばしば取り上げられ、大名松平定直に対した其角の「御秘蔵に墨をすらせて梅見哉」(『焦尾琴』)の態度と比較されている。しかし、この付合は、殿と御伽衆風の間係をことさらにもて遊ぶ趣きがあり、くつろいだ席での応答を以て、不角の性質を推測するのは適当ではない。

○ 三〇日、鴨立沢・酒匂村を経て小田原泊。鴨立庵の大淀三千風は九州旅行で不在。

・坊も留守泣キぢからなし夏の昏 不角

夜、本陣にて備角・雷角・竜角・笋角と五吟半歌仙・余興二句を巻く。

○ 六月一日、箱根・三島を経て、沼津泊。

○ 二日、原・吉原を経て、澳津泊。

○ 三日、清見寺・江尻・府中・藤枝・島田・金谷を経て、袋井泊。途中、府中にて暇を乞い、門人只圭を訪問する。

・府中に着。爰に不角門弟江戸より居をかへて住り。しばしいとまを乞ゆへ、泊りにて追付べしとて、いとまをやりぬ。かくてかしこに至りければ、ほどふりて■(二字判断不可)六道の辻にて小判拾ふたる心ちして、うれしさ限りなく、帰国の折は此処に通(逗)留してなど、あすの事いへば、鬼の笑ふも恥ず、ちかひものして、

それは乙女是は不角

吹とちよ吾妻の君を薫る風 府中只圭

といひわかれて、ほどなく追付ぬ。

『蠅袋』は、備角の著作として配慮されているが、本段のように、実質上の作者不角の視点や口調が、自ずと顕れる所もある。

○ 四日、みかの原・池田・浜松・舞阪を経て、白須賀泊。

○ 五日、吉田・御油を経て、藤川泊。

○ 六日、岡崎・八橋・池鯉鮒を経て、宮泊。

○ 七日、海上七里・桑名を経て、四日市泊。

海上七里の船上、備角・不角・雷角で俳諧三つ物に興ずる。

○ 八日、伊勢参宮。石薬師・亀山を経て、坂の下泊。

途中、石薬師にて、備角に「不角、汝は何と願はなきか」と問われ、「法の橋法の眼のすゞしかれ」と詠んで、法橋・法眼の身分を大望していることを答えると、「二ッの願の内一ッは心にまかしなん」と約束される。

不角が法橋位を賜ることができたのは、備角池田綱政の後援によるところが大きかったようである。荒木祐臣氏著『備前藩殿様の生活』には、「この（綱政の側室に京都の下級公家・被官・神官の娘が多いこと。安田注）理由は、綱政の公家趣味からきてといえるであろう。綱政の性格についてみると、彼は父、光政と違って、無骨なことが嫌いで、彼が、常に心をよせたものは専ら公家一辺倒で、参勤交代の途中は必ず、京都に立ち寄り、一家家はじめ多数の公家衆や神官と交わり、優雅な公家趣味に耽ったが、特に、その姫君たちの、みやびやかな趣味と教養に大いにひかれ」と、綱政と公家の密接な交流が指摘されている。

○ 九日、鈴鹿山・水口を経て、石部泊。

○ 一〇日、草津・膳所・義仲寺を経て、大津泊。

・義仲の石塔哀に、朝日將軍の威も入り日と成てかわれ、弔ひ奉る形にも見えず。草茫／＼と生茂りぬ。

うつむけば頭は見えず田草取　びかく

芭蕉が墓も此処にありて、

泣兒せよと破れ下地の夏芭蕉　不角

芭蕉の墓前で発句を詠むが、必ずしも深い感慨があるようには見えない。

- 一日(あるいは二三日)、山科・関の清水を経て、京着。途中、心中を目撃する。先斗町に宿を定め、門人藤井柳角を訪ねる(『蠅袋』『誹諧一峠』『誹諧広原海』)。
- 柳角は京醒井の人。「古、江府にさすらひて、此道に心をよせ、松月堂の教をうけ、誹諧の二葉より枝ぶりのよしあしを直され、一年にあまり老師の側に起ふし、十あまりふた年先に都に住所をもとめ」(『誹諧広原海』) 人である。
- 一四日、祇園・東山の寺社仏閣、四条の橋、芝居などを見物する(『誹諧一峠』)。
- 旅館より東山の寺社仏閣は鼻につかへ、今はじまるの太鼓の音、四条の橋のかづきすがた、あみ笠に黒羽織、あてや治童の芝居行。白人の道中は、格子のさきをゆきかひ、ゆんでもめても筋むかひも、美女でかためたる家居、目より入て鼻につくほど也。すゞみのどうぶくしなれば、くれ初るより、凡八町ばかりは、灯と人にて寸地もなく、男より女の見物多くて、川に床ならべて、あしを冷す。
- 六月、伏見の船場に備角を送る。備角より、これまでの道中を記した「此みちの記、蠅袋と号て、桜にさかせよ」と、版行を申し付けられる。また、「法橋」位を賜ることを祝い、発句を贈られる。(『蠅袋』『誹諧一峠』)。
- 船にのりしに、不角は兎角涙にうろく眼して、船ばたに手を懸て
是からや糊くにはなれし蠅の力 不角
- 七月七日、七夕の発句を詠む(『誹諧一峠』)。
- 七日夜、東雲まで鳴り止め三味線。ひがしがしらむドンとうたふ
明アスの夜はないぞ二星のわかれ鼓音ドン 不角
- 一六日、盂蘭盆の風俗や大文字焼の風情に感じ入る(『誹諧一峠』)。
- 四大元ト火に成筈よ手向種
- この頃、夜船で大坂に下り、二日遊ぶ。帰途、宇治を廻る(『誹諧一峠』)。
- 二三日、勅命を得て、法橋の位を賜る(『一峠』『誹諧広原海』)。
- 有難くも大願成就して、地降をはなれて雲中に入る心地して冥加と言もあまりなり鳧。
- 二四日、人々の祝賀と奉り物に、日を暮らす(『誹諧一峠』)。

○ 二五日、各所に御礼をすます。大願成就の返礼のために「小野の御社」に参詣する（『誹諧一峠』『誹諧広原海』）。

○ この頃、法橋位受領の御礼のため、西本願寺大僧正寂如上人（ジャクニョ）を訪問する。土器とともに「吾妻よりはるくのぼる法の月」の句を賜り、「菊いたゞきの冥加ある鳥」の脇句を付ける（『続清鑑』）。

○ この頃、人々を誘い、嵯峨野に遊ぶ。翌日、言水から「きのふ嵯峨の発句有なまし。此昏一会催べし」と誘われ、似船・鞭石・柳角・方風・好春と七吟歌仙を巻く。

不角は、言水を「元ト言水も江戸の俳師なりければ、同じ水道の味を汲し心より、外とは思はず。殊に気散じなる意ばへ面白く」と評している（『誹諧一峠』）。

・月はまだいざ呼かへん渡月橋 不角

蟾も蝸牛も花萩の中 言水

客ふりを秋の涼風声添て 似船

○ この頃、柳角と東山靈山東光寺に参詣し、同所の八景の句を詠む（『誹諧一峠』）。

・東寺雁塔 横たはり雁や九輪に十文字 柳角

八坂夕照 往と来と坂で西日を側扇 不角

○ この頃、備角から賜っていた賀句を発句に、似船・鞭石・我黒・好春・方山・言水・柳角・滴水・如泉と脇起世吉を巻く（『誹諧一峠』）。

・はじめの願ひは足ぬべし。なを長生してはまれをかさねよ

一峠越たり末に雲の岑 岡山備角

イ立ッ 皆夏を面 不角

すゞしさの蕎麦打音は月昏て 似船

○ 七月、備角著、俳諧紀行『蠅袋』成。不角の発句四〇句（三つ物発句一句を含む）・三つ物七組・半歌仙二巻を収録。半歌仙の連衆、備角・笋角・龍月・雷角は、すべて岡山藩士。

江戸から京に到る俳諧紀行で、巻首に「鯉竜堂備角選」と記す。表現も備角作のように配慮されているが、細部を検討すると実質

的な著者である不角の視点が、そのまま顕れている箇所も指摘できる。また、藤沢の条の野ざらしや、山科奴茶屋の由来を長々と紹介するのも、浮世草子を執筆していた頃の不角の筆致に通じるものがある。

※半紙本二巻二冊。不角版下・自家版。東京大学図書館酒竹文庫蔵。

○ 八月三日、江戸で朋角と巻いた未完両吟百韻を、柳角とともに満尾するか（『誹諧広原海』）。

○ 四日、丹後国宮津の門人生田紅筍に促されて、京を出発する。途中、三瀬川・ふこう峠・千丈ヶ建山・強盗茶屋などを通る。また、丹波の父打栗（てつちり）について考証する（『誹諧一峠』『誹諧手、内栗』）。

○ 六日、申の下刻、宮津に着く。宿泊する大和屋何某に、宿はずれまで迎えられる。紅筍宅を訪ねる。以後、一八日間、宮津の連衆と風交を結ぶ（『誹諧一峠』『誹諧手、内栗』）。

・ 在京のほど、度々まねきにあひて

二十八里お手が届くぞ花すゝき 不角

欠を払ふ月の文台 紅筍

○ この頃、成相観音の山僧言都（俳号吐虹）に招かれ参詣する。

・ 愈合ぬきれども有に鹿の声 不角

の発句を得る。宮津の門人奥平花伯により、額となし、観音の宝前に残す（『誹諧手、内栗』『兎手柏』）。

○ 一五日、天橋立にて名月を観る（『誹諧広原海』）。

○ 二四日、宮津を出発し、京に戻る（『誹諧一峠』『誹諧手、内栗』）。

・ 松月堂旅立給ふ宵、かたり明かして、別をしたひて

綻つと秋かたびらを引とめん 紅筍

月に長ると盛久を舞ふ 不角

○ この頃、不角編、俳諧撰集『誹諧一峠』成。剃髪、京旅行発足、京滞在と法橋位拝命、丹後旅行と、『蠅俗』前後の風雅を集め一書としたもの。巻末に、丹後宮津で巻いた歌仙六卷・世吉一巻を添える。

本書は、殊に他門の俳諧師との関わりが興味深い。江戸では依然として桃隣と親密な関係を保っている。また、不角と一座する京

の俳諧師たちの顔ぶれからは、当時の京俳壇の動静が垣間見える。

※半紙本一巻一冊。自家版。書名は、備角より賜った賀句による。東京大学西竹文庫他蔵。

▽ 八月下旬、紅筍編、俳諧撰集『誹諧手、内栗』成。丹後国宮津の門人紅筍が、不角の来訪を記念して編んだ書。不角は「一峠の追加」(『誹諧一峠』)と、自らの撰集と一対になる書と位置づけている。

上巻は、京から丹後までの旅と宮津の名所を記した不角の序文に始まり、宮津の連衆紅筍・笈船・左琴・花伯との五十韻二巻、丹後の門人の発句に不角と紅筍が、脇・第三を付けた三つ物などを収録する。下巻は、不角・紅筍両判による前句付や四季発句などを収録する。不角前句付の末端に当たる、地方連の実態を窺わせる好資料である。鈴木勝忠氏『雑俳集成二期』巻六に翻刻。

○ 八月、不角編、前句付高点句集『誹諧広原海』成。自序。巻末に不角一座の百韻(不角・朋角・柳角)一巻、歌仙(不角・紅筍・山卷・農角)一巻収録。

・我若年より誹諧に数寄て、いまだ其滑稽コウケイにいたらざれば、数年前句といふものを出して、点をするといへども、点をするにあらず。是を見、かれを我物にして功をつみ、人々の厚智を借りぬれば、偏に句くは、是、予が師たるべし。と、前句付点者を始めた動機を記し、さらに、批点ヒツに追われる生活を、

・されど、近年は一入巻ひとしほの点日に重なり、独吟して集に加ふべき違イトラフなければ、

と述べる。半年あるいは一年毎に刊行してきた高点句集刊行の大幅な遅延は、これが理由であったという。

※半紙本、二二巻二三冊。前句付高点集の第一四集。自家版。元禄一一年正月〜一四年一二月分を収録。途中、三句付から一句付、さらに二句付など、興行形態の変容を余儀なくされている様子がわかる。鈴木勝忠氏『雑俳集成二期』巻五・六に翻刻。

○ 九月初め、柳角より、後の月まで京に滞留してほしいと請われるも、江戸に残す老母を気遣い、江戸に帰る(『誹諧広原海』)。

○ 一月二二日、母、没。七七歳。戒名は、貞信院妙性禅定尼靈位(『母恩集』)。

・八々ハハチ児鳥チは、僧の念仏するを聞て、おのが囃ハとして死す。

○ 一二月二五日、一二月分の一旬付前句付興行の高点句を二回分合わせて紹介する。その理由を「右は旧冬、物騒がしき事打つぎ人数不足故」と記す。同様に脇起表八句点取興行も、一一分分と合わせ、「旧冬、物騒き事打つぎ人数不足」と記す。「旧冬」を元禄一五年とし、赤穂浪士の討入りとする説もあるが、むしろ、翌年正月から見ての元禄一六年の冬のことであろう。とすれば、

一月二二日の江戸大地震、二九日の江戸大火をさすと思われる（『せとりぶね』『兎手柏』）。

宝永元年（一七〇四）甲申 四十三歳

▽ 一月、鱗子編、雑俳手引書『誹諧よりくり』刊。不角の前句付収録。伊賀の鱗子が編み、京の書肆によって刊行された本書は、前句付を作意のはたらきを会得する俳諧修行の第一と位置づけ、前半は編者自作の式目歌に付合の心得を示す。後半は、鞭石・晩山らの前句付・発句・笠付の高点句を抄録する。

・又あま店の商人の云。五穀きぬわた器物材木に至まで、皆く上方よりくだる。東より上方へ向ん物はいふに、其角が俳諧であらふと申き。

と、記した後、其角点ではなく、不角と一晶撰の前句付を掲げる。不角点は『へらず口』からの流用。

▽ 二月、座神編、俳諧撰集『風光集』成。不角の発句一句収録。

・口をすふ掛鯛など土佐日記 不角

伊丹の座神編の撰集で、歌仙と発句からなる。四季発句は、伊丹俳壇を中心に、談林・蕉門などの作を幅広く収録する。

○ 五月、不角編、前句付高点句集『せとりぶね』成。自序。巻末に不角・一蜂の両吟歌仙二巻、何角・不角・尹角の三吟歌仙一巻を収録。

一句付高点集。毎回一八番までの高点句を掲げ、一蜂点との組み合わせで、順位を定める（元禄一五年二月一五日の条参照）。

寄句数は四〇〇〜一一〇〇程度で、興行によりばらつきが大きい。宮田政信氏は、『雑俳史の研究』において、「正体なき前句の専用と、一句に奇想を追ふ付句と相俟つてすでに雑俳の前句付と選ぶところがない」と、評しておられる。

また、巻末に紹介する二句付興行一回分は、

・二句附、下帳紛失。漸此一前句を見出して、爰に加フ。尚追く

と注するが、新たな興行形式を提示して、読者の反応を試みているかのようである。しかし、前句付興行の衰退傾向は、形式を改変しても、すでに歯止めが利かなくなりつつあった。

※半紙本三卷三冊。前句付高点句集の第一五集。自家版。元禄一五年二月〜宝永元年五月締切分を収録。綿屋文庫他蔵。

○ 六月二五日、二句付前句付興行、正式に始まるか。以後、毎月一〇日・二五日を締切として興行する。

二句付は、前句題一句に対して、投句者が付句を二句一組で応募し、組毎の点を競うものである。投句者が固定化し、数的な伸長が望めなくなり、既存の投句者から倍の句数を得る（当然投句料も値上がりしたのであろう）工夫ではなからうか（『水馴棹』）。

▽ 六月、長角編、俳諧撰集『根なしかつら』刊。不角の発句六句、不角点前句付を収録。

・ 枯芦の中や折く櫓の呻ウツリ 江戸不角

朽繩軒荒川長角は、大坂住の門人。江戸で不卜に学び、その没後に不角付随し、後に故郷大坂に帰った門人峽水の連衆と思われる。俳論・紀行中に、諸家の発句・三つ物・連句などを紹介する。仲間の流角・糸白、京の柳角、会津の錦角ら不角門の他に、大坂の一礼・園女・来山、京の正由・如泉・似船・方山・晩山・好春・鞭石・我黒、江戸の無倫・秀和などの他門の俳諧師の作も少ない。

○ 一二月二五日、二句付前句付興行、「連不足」のため、翌月締切日に発表を延期する。（『水馴棹』）。

宝永二年（一七〇五）乙酉 四十四歳

○ 二月三日、二世立志没、四八歳。江戸石町住の立詠（後の三世立志）に、追悼句を送る（『二世立志終焉記』）。

・ 歳旦を今さらあぢきなく

命毛のない筆初つ寿の一字 不角

▽ 四月、錦角・庸角編、俳諧撰集『誹諧一河流』成。不角の序、発句八句、一座の歌仙一卷（不角・庸角・錦角・尹角）、三つ物二組、不角点の高点付句収録。

・（略）今、予が門葉五百輩に過たれども、志を運ぶ人は十がひとつ也。志すくなきのみか、アマツサヘ 臆 同門の非をけくなくソシ 咄あふて（略）コトニ 繁桜月堂錦角子・檉月堂庸角子、あくまで此道の数寄人にて、一集を建立して松月堂に寄附す。されど他門へ句の奉財を乞ふ。唯同門の厚志をのみ探り、ほまれを挙て物せんと誓ふ

と序にあるが、内容から見て不角親撰に等しい書と思われる。

上巻には、不角の発句を各季の巻頭に絵入で置く四季発句。中巻には、雑題の部として、「十二月題」や江戸名所の題詠組物などを

収める。下巻には、不角点の高点付句、連句・三つ物、自跋を収録する。

特に注目すべきは、「同門の中、師翁点巻にて十八点已上の無上宝を集メ」た高点付句の抜書である。これまで、不角の出版活動の主力であった前句付高点集は、興行の不振によって衰えを見せ始めていた。二年後、これに取って代わるのが、高点付句抜書集『箋纏輪』である。本書は、その試作としても注目される。

○ 五月下旬、不角編、前句付・点取高点集『水馴棹』(巻四は書名『兎手柏』)成。自序。不角の二句付前句付高点、脇起表八句の高点を紹介。巻末に不角の独吟百韻を収録する。

巻四にあたる『兎手柏』収録の脇起表八句高点は、毎月上位二人の表八句を紹介し、二〇位までは名前のみ掲げる。ただし、この興行は、結果の公表が次第に遅れがちになり、三ヶ月分合わせて発表されるなど、あまり活発ではなかったようである。なお、この頃より作者名の右肩に付す地名の他に「尾上組」「素吟組」「根笹組」などが見えてくる。集句の際に、組という小単位の門人組織が定着してきたことがわかる。

※半紙本、四巻四冊。不角前句付高点句集の第一六集。自家版。宝永元年六月〜二年四月締切分を収録。国会図書館蔵。

▽ 六月、東行編、俳諧紀行『東行撰集抄巻三』刊。不角の発句一句収録。元禄一一年秋、江戸に滞在していた東行が、浪花に帰る折の賤別句(元禄一一年の条参照)で、沾徳・直方・岩翁らの句と並んで置かれている。

▽ 七月、書肆編、雑俳撰集『野郎帽子』刊。不角点の前句付収録。ただし、宝永元年刊『誹諧よりくり』の増補改編版。

▽ 八月頃、等躬編、俳諧撰集『一の木戸』成。下巻(下巻のみ存の零本)に、不角の発句一句収録。

・ 秋草

雲かとも尾花が庵の煙出し 不角

等躬の第三撰集で、其角・調和・露沾など、門流を問わず、広く三都・東北の俳家の句を集める。成立は、久富哲雄氏「等躬編『一の木戸』の成立年時」(『俳文芸』一六)によれば、同年五〜八月頃。

○ 九月下旬、不角編、連句集『誹諧粘飯籠前集』成。不角独吟の漢和歌仙一卷、不角一座の百韻五巻、七十二候一卷、源氏三巻、五十韻二巻、世吉二巻、歌仙一八巻、半歌仙七巻、首尾一卷、また、不角の発句を脇起とした源氏一卷、歌仙二巻、半歌仙一卷を収録。巻末に門人の四季発句を付載する。あるいは、同年七月刊行の沾徳編『余花千句』などに影響されたものかと思われるが、一

門の作風と繁栄を誇示する効果は十分にあり、以後しばらく、こうした大部の連句集が、不角の出版活動の一翼を担うことになる。

・ 誹諧之漢和 独吟法橋不角

紅花ヒシヤケ 低鼻タトヘ 譬

茄子キシカキズの兀頭タマ瑕の有る疵

※半紙本、五卷五冊。国会図書館蔵。

▽一〇月一日、書肆編、雜俳撰集『七ついろは』刊。不角点の前句付収録。ただし、元禄二六年刊『万歳烏帽子』の改題偽版。